

# 人々とスポーツ国際大会

～文研の世論調査から考える～

計画管理部 齊藤孝信

NHK放送文化研究所が過去に実施した「全国個人視聴率調査」と「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」の結果を、長期的・横断的に分析し、視聴実態と意識の両面から、人々とスポーツ国際大会との関わりを考察する。

実態面では、人々がスポーツの国際大会を、“ふだんのスポーツ”よりもよく視聴していた。その傾向は女性40・50代で顕著で、たとえば2022年調査では、国際大会であるサッカーの視聴率が18%と高かったが、国内大会の陸上競技やゴルフなどはほとんど見られなかった。

その背景には、人々が、日本選手が“世界に挑む”姿を応援し、勝利を大いに喜ぶ意識がある。たとえば東京オリンピックで、競技に関して「最も印象に残ったこと」として、女性50代では「日本が過去最多の金メダルを獲得したこと」が37%で最も多く、「若い選手たちの活躍ぶり」などを上回った。また、「印象に残った競技・式典」でも日本勢が金メダルを獲得した「卓球」「柔道」などを挙げた人が多く、大会前に観戦意欲を持っていた人が13%しかいなかった「スケートボード」も、日本勢の活躍により、大会後は37%の人が「印象に残った」と答えた。一方で、リオデジャネイロオリンピックで日本がメダルを獲得した競技への観戦意欲が、大会後わずか2年ほどで減少したほか、東京オリンピック・パラリンピックの盛り上がり方が「一時的なものにすぎなかった」と考える人が65%に達するなど、国際大会をきっかけとしたスポーツの盛り上がりは“熱しやすく、冷めやすい”一面も浮き彫りになった。

## はじめに

1年の延期を経て2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピック、2022年のサッカーのFIFAワールドカップ（以下、W杯）カタール大会、そして2023年に行われた野球のワールド・ベースボール・クラシック（以下、WBC）と、ここ数年、世界規模のスポーツ大会が相次いで開催された。日本勢は、東京オリンピックで史上最多58個のメダル（金27個、銀14個、銅17個）を獲得したほか、W杯では強豪ドイツ、スペインを破ってのベスト16、WBCでは無敗での完全優勝と、いずれの大会でもめざましい活躍を見せ、国内では多くの人たちがテレビの中継やインターネット動画配信を通じて視聴して大いに盛り上がった。

体感的には、こうした大きな国際大会には

人々を夢中にさせ、メディア視聴や応援したいという気持ちを駆り立てる力があるように思えるが、果たして世論調査の客観的なデータからも「国際大会は人々にとって、“ふだんのスポーツ”とは違う特別なものである」と言えるのだろうか。

本稿では、NHK放送文化研究所（以下、文研）が過去に実施した複数の世論調査の結果を長期的・横断的な視点で再分析し、視聴実態と意識の両面から、人々と国際的なスポーツ大会の関わりについて考えてみたい。具体的には、毎年実施してきた「全国個人視聴率調査」を用いて視聴実態を、2016年から2021年にかけて実施した「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」を用いて意識面を分析する。

なお、各調査回のサンプル数については、末尾に紹介する過去の『放送研究と調査』を参照いただきたい。

## I. “世界を相手に日本が挑む” 国際大会をよく見る女性40・50代

まずは「全国個人視聴率調査」の結果を用いて、テレビのリアルタイム視聴の実態面から、人々がスポーツの国際大会をどのように視聴していたのか、さらに言えば、“ふだんのスポーツ”の見られ方とどのような違いがあるのかを考える。なお同調査は、定点観測によって長期的な視聴傾向を把握する目的で、全国7歳以上3,600人（2022年からは4,500人）を対象に、6月第1週に実施しているものである。

表1には、本稿執筆時点における最新データである2022年の結果から、調査を行った1週間の8～23時に生中継されたスポーツの試合の視聴率上位10番組を示した<sup>1)</sup>。ここでは、民放で放送されたスポーツ中継の視聴率もみるために、局別に調査している関東のデータを用いる。

月曜夜に放送された「キリン杯・日本×ブラジル」が13.9%と最も高く、次いで金曜夜の「キリン杯・日本×ガーナ」が7.0%と、この週に開催されたサッカーの国際大会がよく見られた。以下、日曜夕方方の「日本陸上2022」

(3.3%)、日曜午後のゴルフ「サントリーレディス」(2.5%)、日曜日中の野球「MLB・メッツ×エンジェルス」(2.2%)と続く。

上位に入った「サッカー（ブラジル戦）」「陸上」 「ゴルフ」 「野球」について、それぞれ男女年齢層別の視聴率を示したのが図1である。

「サッカー」は、男性の各年代と、女性40・50代以上でそれぞれ10%以上とよく見られた。ただし、男性の60歳以上は「陸上」も11%、「ゴルフ」と「野球」も7%と高いことから、“スポーツ自体をよく見た”と言うべきであろう。

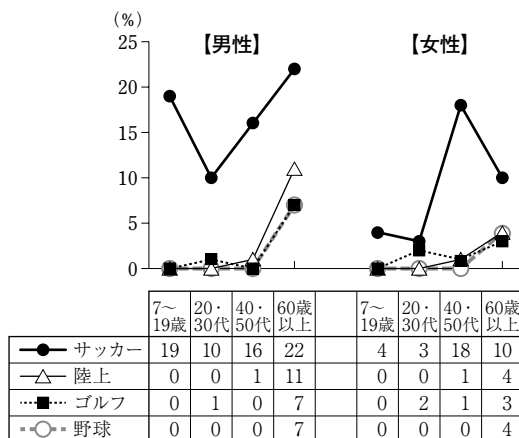
一方で、男性40・50代以下と女性40・50代以上では「サッカー」とそのほかの3競技の視聴率に差がある。たとえば女性40・50代は「サッカー」は18%だが、そのほかはいずれも1%以下と、ほとんど見られなかった。このときの「陸上」と「ゴルフ」は国内大会、「野球」はMLBの通常シーズンで、「サッカー」だけが、日本代表が“世界に挑む”国際大会であった。言い換えれば、男性40・50代以下と女性40・50代以上は、“ふだんのスポーツ”よりも国際大会をよく視聴したという見方もできそうである。

表1 スポーツ中継の視聴率上位10番組  
(2022年6月6～12日の8～23時に放送開始したものに限り)

局	曜	放送開始	試合(番組)名	視聴率%
日テレ	月	19:20	【サッカー】キリン杯・日本×ブラジル	13.9
TBS	金	18:30	【サッカー】キリン杯・日本×ガーナ	7.0
総合	日	16:00	【陸上】日本陸上2022	3.3
フジ	日	13:35	【ゴルフ】サントリーレディス	2.5
BS1	日	11:00	【野球】MLB・メッツ×エンジェルス	2.2
総合	土	16:00	【陸上】日本陸上2022	2.1
フジ	土	15:00	【ゴルフ】サントリーレディス	1.6
BS1	土	10:30	【野球】MLB・メッツ×エンジェルス	1.6
BS1	金	10:30	【野球】MLB・レッドソックス×エンジェルス	1.5
BS1	水	10:30	【野球】MLB・レッドソックス×エンジェルス	1.4

2022年6月全国個人視聴率調査(郵送法・関東)

図1 上位4競技の視聴率(男女年齢別)



2022年6月全国個人視聴率調査(郵送法・関東)

ただし、MLBについては、そもそもBSの視聴率が地上波よりも低いため、こうした比較自体がややナンセンスなかもしれず、かつ、MLBを“通常のシーズン”とみるべきか、日本人選手が“世界に挑む”ものだとみるべきかの判断も難しい。これについてはのちほど、野球について分析する際に改めてくわしくみていきたい。

“ふだんのスポーツ”よりも国際大会をよく視聴する傾向が、2022年に限ったことではないかを確認するために、サッカーの国際大会「キリン杯」が、同じく6月の視聴率調査週に開催された2017年についても、結果を確認しておきたい(表2)。ただし、「全国個人視聴率調査」は、コロナ禍による中断以前の2019年までは「配付回収法」で行っていたため、表1の2022年(郵送法)の結果と単純に比較することはできない。

2017年の調査週には、水曜夜のサッカー「キリン杯・日本×シリア」が9.0%と最もよく見られた。以下、月曜夜の「世界卓球・女子ダブルス・伊藤早田ペア」(6.9%)、同じく月曜夜のテニス「全仏オープン・錦織×フェデラー」(5.2%)、土曜夜の「プロ野球交流戦・日本ハム×巨人」(3.2%)と続く。

表2 スポーツ中継の視聴率上位10番組

(2017年6月5～11日の8～23時に放送開始したものに限る)

局	曜	放送開始	試合(番組)名	視聴率%
日テレ	水	19:20	【サッカー】キリン杯・日本×シリア	9.0
テレ東	月	20:00	【卓球】世界卓球・女子D・伊藤早田ペア	6.9
テレ東	月	21:00	【テニス】全仏オープン・錦織×フェデラー	5.2
テレ東	土	19:00	【野球】プロ野球交流戦・日本ハム×巨人	3.2
テレ東	水	22:00	【テニス】全仏オープン・錦織×マレー	2.8
フジ	日	16:00	【ゴルフ】サントリーレディス	2.8
テレ朝	日	13:55	【野球】プロ野球交流戦・日本ハム×巨人	2.4
フジ	土	15:00	【ゴルフ】サントリーレディス	1.6
日テレ	土	14:30	【ラグビー】リボビタンD杯・日本×ルーマニア	1.3
総合	日	13:05	【野球】プロ野球交流戦・オリックス×中日	0.6

2017年6月全国個人視聴率調査(配付回収法・関東)

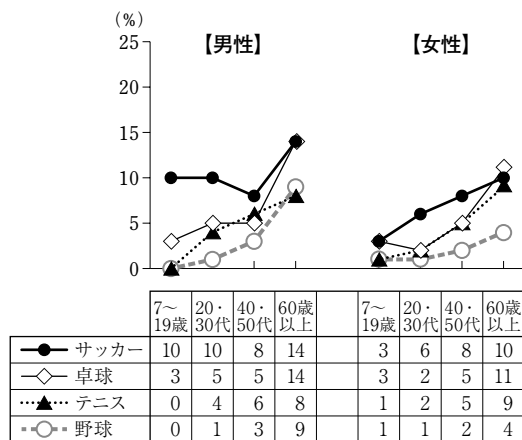
上位となった「サッカー」「卓球」「テニス」「野球」の視聴率を、男女年層別にみている(図2)。

「サッカー」が、男性の各年代と女性40・50代以上で10%前後とよく見られていたことと、男性60歳以上が4競技のいずれもよく視聴していたことは、2022年と同様の傾向である。

一方で、男性40・50代や女性40・50代以上では、「卓球」(男女とも40・50代で5%、女性60歳以上で11%)や、「テニス」(男性40・50代で6%、女性40・50代で5%、女性60歳以上で9%)もよく見られており、この年代が「サッカー」以外はほとんど視聴しなかった2022年とは様相が異なる。ただし、この年の調査でも、「野球」は男女とも40・50代では3%以下と低調であった。

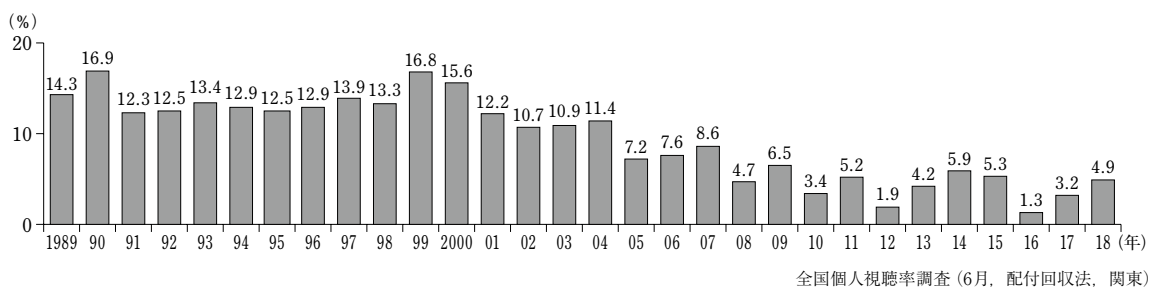
国際大会か否かという視点でみると、男性40・50代や女性40・50代以上にもよく見られたこの年の「サッカー」「卓球」「テニス」は、いずれも日本選手や日本代表チームが世界の強豪を相手に戦う、1～数年に1度の大きな国際大会である。それぞれ、代表選手の知名度も高く、メディアでも大会前からさかんに取り

図2 上位4競技の視聴率(男女年層別)



2017年6月全国個人視聴率調査(配付回収法・関東)

図3 プロ野球（国内）の視聴率の推移（各年の6月調査週で最も視聴率の高かった試合）



上げられ、話題となっていた。一方で「野球」は、セ・パ交流戦とはいえ、国内での通常シーズンであった。

このように、特に男女の40・50代を中心に、人々は、通常の国内の試合中継よりも、日本が“世界に挑む”大きな国際大会のほうをよく見る傾向がある。

では、同一の競技でも、国内の試合より国際大会のほうがよく見られるのだろうか。国際大会だけではなく、国内の通常のシーズンの試合も放送されることの多いプロ野球に注目して、たしかめたい。

まずは国内の試合について、引き続き、6月の「全国個人視聴率調査」の関東の結果から、同じ配付回収法で比較可能な平成30年間（1989～2018年）の長期的な推移をみる。

図3は、各調査週の夜間（18時以降）に地上波で生中継されたプロ野球の試合のうち、最も視聴率の高かった試合を示したものである。長いシーズンのうち、たった1週間に限った結果であるので、これをもってその年の見られ方を語り切ることはできないが、大づかみに言うと、平成30年間の視聴率は“右肩下がり”である。2004（平成16）年までは10%を超えていたが、2005（平成17）年以降は5%前後の年が多くなった。平成後半には地上波での中継自体が減ったり、BSやCS、インターネット動画

サービスなど、視聴手段が多様化したりした影響もあるだろうが、少なくとも6月の地上波テレビ視聴においては、“プロ野球観戦離れ”が進んだようにみえる。

では、国際試合はどうか。表3は、2019年まで11月にも行っていた「全国個人視聴率調査」から、各年の調査週で最も視聴率の高かった中継番組を抜き出したものである。

国内のプロ野球の視聴率が前述のように2005年以降、低くなったのに対し、国際試合は、2012（平成24）年にも9.2%、2015（平成27）年には10.1%と、引き続きよく見られていた。このうち10.1%となった2015年は、「世界野球プレミア12」のベネズエラ戦であった。日本は、当時日本ハムに所属していた大谷翔平、巨人の澤村拓一、菅野智之、坂本勇人、ヤクルトの山田哲人、横浜の筒香嘉智、西武の秋

表3 野球の国際試合の視聴率  
（各年の11月調査週で最も視聴率の高かった試合）

年	局	曜	放送開始	試合（番組）名	視聴率 %
1998	日テレ	火	19:00	日米野球	10.3
1999	テレ東	水	19:00	日韓プロ野球スーパーゲーム	3.2
2000	TBS	火	19:00	オールスター日米野球	11.3
2001	日テレ	土	21:00	W杯野球・日本×キューバ	7.2
2002	日テレ	月	19:00	日米野球第2戦	12.3
2012	TBS	金	18:30	野球侍J・日本×キューバ	9.2
2014	日テレ	土	18:00	日米野球第3戦	7.3
2015	TBS	日	18:30	世界野球・日本×ベネズエラ	10.1
2017	テレ朝	日	18:00	アジアプロ野球決勝・日本×韓国	5.4
2018	日テレ	火	18:30	日米野球第4戦	6.4

全国個人視聴率調査（11月、配付回収法、関東）

山翔吾などの有名選手がそろった。特にこの試合は、8回の裏から9回裏まで、3度の逆転が起きる名勝負であった。

この「ベネズエラ戦」の視聴率を、参考として同年6月にプロ野球中継の中で最もよく見られた「日本ハム×巨人」のデータと見比べてみる(表4)。

まず全体では、11月の「ベネズエラ戦」が10.1%、6月の「日本ハム×巨人」が5.3%であった。そもそも異なる季節の調査であり、同時期に他局で放送された番組や曜日の影響もあるので、両者の数字同士を直接比較することはできないが、国内のプロ野球に比べて、国際試合のほうが相対的に数字が大きい。

男女年層別にみても、男性の20・30代(「ベネズエラ戦」7%、「日本ハム×巨人」1%)と、男性40・50代(「ベネズエラ戦」15%、「日本ハム×巨人」4%)、女性の40・50代(「ベネズエラ戦」9%、「日本ハム×巨人」2%)などで、国際試合のほうが数字が大きくなった。

次に、平成30年間の文研の11月調査週に行われた国際試合のうち、最も視聴率が高かった2002年「日米野球第2戦」についてもみしてみる。このシリーズには、イチロー選手がMLB代表の一員として凱旋。そのほかにもジャイアンツのホームラン王バリー・ボンズや、ヤンキースの看板選手、バーニー・ウィリアムズなどスター選手が名を連ねた。迎え撃つ日本代表も、のちにアメリカに渡ることになる松井秀喜、松井稼頭央、岩

隈久志、上原浩治、福留孝介などトップ選手が勢ぞろいした。第2戦では日本が8対2で勝利を収めている。

この「日米野球第2戦」の視聴率も、参考までに、同年6月にプロ野球の中で最もよく見られた「ヤクルト×巨人」のデータと見比べる(表5)。

全体では「日米野球第2戦」(12.3%)も「ヤクルト×巨人」(10.7%)もよく見られたが、女性40・50代では、このときも、国際試合(「日米野球」15%)のほうが、国内の試合(「ヤクルト×巨人」8%)よりも相対的に数字が大きい。このように、あくまで参考程度の見比べではあるが、どちらの年も、女性40・50代は、国際試合をよく見ていたのである。

ここで、先にも述べたように、地上波の視聴率と単純に比較することが難しいBSで放送され、かつ、“通常のシーズン”とみるべきか、日本人選手が“世界に挑む”ものだとみるべきかの判別も困難だとして棚上げしておいたMLBについて、くわしくみてみたい。

表4 2015(平成27)年「世界野球プレミア12」の視聴率(男女年層別)

局	曜日	放送開始	全体	男性				女性					
				7~19歳	20・30代	40・50代	60歳以上	7~19歳	20・30代	40・50代	60歳以上		
11月	ベネズエラ戦	TBS	日	18:30	10.1	2	7	15	18	4	2	9	10
【参考】													
6月	日本ハム×巨人	テレ朝	火	19:00	5.3	4	1	4	15	0	3	2	6

■全体より高い □全体より低い 全国個人視聴率調査(関東)

表5 2002(平成14)年「日米野球第2戦」の視聴率(男女年層別)

局	曜日	放送開始	全体	男性				女性					
				7~19歳	20・30代	40・50代	60歳以上	7~19歳	20・30代	40・50代	60歳以上		
11月	日米野球第2戦	日テレ	月	19:00	12.3	12	7	16	23	5	8	15	9
【参考】													
6月	ヤクルト×巨人	フジ	水	19:04	10.7	7	8	12	21	5	7	8	15

■全体より高い □全体より低い 全国個人視聴率調査(関東)

全体に対する各年層の特徴をみるために、該当する層と、全体から該当する層を除いた残りの層で「互いに独立な%の差の検定」を行った結果。以下の検定式を用いている(以下同様)

$$z = \frac{|p_1 - p_2|}{\sqrt{p_1(100 - p_1) \left( \frac{1}{n_2} - \frac{1}{n_1} \right)}}$$

・ サンプル数: (全体) n1, (一部) n2  
 割合(%): (全体) p1, (一部) p2  
 ・ z = 「1.960」以上なら「有意水準(危険率)5%で」有意差あり

表6は、2022年6月「全国個人視聴率調査」の全国の結果から、NHK BS1の視聴率上位番組を示したものである。10番組中7番組が大谷選手の出場したMLBのエンジェルス戦であった。つまり調査週に行われた7試合すべてがランクインしたのである。

アメリカ西海岸に本拠地を置くエンジェルスの試合は、ナイトゲームの場合、日本では日中に放送されることもあり、トップ2は多くの人が比較的視聴しやすい日曜と土曜の試合となった。一方、平日トップとなった金曜の対レッド

表6 NHK BS1の視聴率上位10番組

曜日	放送開始	試合(番組)名	視聴率%
日	12:50	MLB・メッツ×エンジェルス	1.5
土	10:30	MLB・メッツ×エンジェルス	1.3
金	10:50	MLB・レッドソックス×エンジェルス	1.2
水	11:50	MLB・レッドソックス×エンジェルス	1.0
月	9:00	MLB・エンジェルス×フィリーズ	1.0
木	10:30	MLB・レッドソックス×エンジェルス	1.0
火	10:30	MLB・レッドソックス×エンジェルス	0.9
水	18:00	プロ野球・ソフトバンク×阪神	0.8
木	18:00	陸上2022・日本陸上	0.8
火	18:00	プロ野球・オリックス×ヤクルト	0.6

(ほか3番組)

■ MLB中継 2022年6月全国個人視聴率調査(郵送法・全国)

ソックス戦は、大谷選手が先発投手としてマウンドに立ちながら、指名打者として打席にも立つ“リアル二刀流”のゲームであった。視聴率は1.2%だが、実は、この時間にリアルタイムでテレビを視聴していた人たちを100とした割合(占拠率)は18%にのぼる。つまり、この時間にテレビ放送を視聴していた人の約5人に1人が大谷選手の試合を見ていたのである。

表7は、調査週にNHK BS1で放送されたMLB中継のうち最も視聴率の高かった日曜のエンジェルス戦と、同じくBS1の国内プロ野球中継で最も高かった「ソフトバンク×阪神」の、男女年層別の視聴率を比べたものである。女性の40・50代と60歳以上では、MLB中継がそれぞれ2%で、数字は小さいものの、国内のプロ野球(女性40・50代0%、女性60歳以上1%)よりも見られていた。このようにBS1に絞って分析すると、40・50代を中心とした女性の中高年層では、国内の通常シーズンよりもMLBのほうがよく見られていた。その点では、MLBは、日本人選手が“世界に挑む”ものだと受け止められているのかもしれない。

さらに時をさかのぼり、2001年以降の各年のBS1視聴率トップ10にランクインしたMLBの試合数を振り返ってみる(図4)。なお、そもそも中継された試合数自体は年によって多少異なるが、ほとんどの年で、少なくとも毎日1試合以上、1週間で7試合以上は放送されていた。

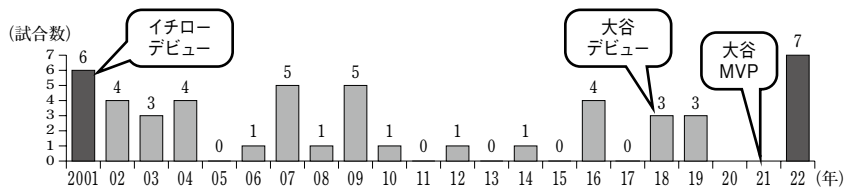
7曜日すべての試合が入ったのは、2022年が初

表7 2022年 NHK BS1 MLBとプロ野球の視聴率(男女年層別)

	(%)	曜日	放送開始	全体	男性				女性			
					7~19歳	20~30代	40~50代	60歳以上	7~19歳	20~30代	40~50代	60歳以上
					MLB・メッツ×エンジェルス	日	12:50	1.5	0	1	1	3
プロ野球・ソフトバンク×阪神	水	18:00	0.8	0	1	1	2	0	0	0	1	

■ 全体より高い □ 全体より低い 2022年6月全国個人視聴率調査(郵送法・全国)

図4 NHK BS1の視聴率トップ10に入ったMLB中継の数



全国個人視聴率調査(2019年まで配付回収法、20・21年調査なし、22年郵送法・全国)

めで、次に多かったのは2001年の6試合である。この年にはイチロー選手がMLBに挑戦し、最終的には首位打者、盗塁王、シルバースラッガー賞、ゴールドグラブ賞、新人王、MVPなど多くの賞に輝き、所属するマリナーズも地区優勝を果たした。調査を行ったのは6月で、まだまだシーズン序盤だったとはいえ、“日本で7度の首位打者に輝いたトップ選手が世界に挑む”姿は渡米前から多くのメディアで注目され、MLBデビュー直後からの活躍ぶりは、“世界に挑む”というよりも、“世界を席卷する”と表現したほうがふさわしいほどだった。

「全国個人視聴率調査」はコロナ禍の影響で2020年と2021年は実施できなかったが、その間、大谷選手は2021年に投打で大活躍して初のMVPを受賞した。全7試合がランクインした2022年シーズン序盤は、2001年のイチロー選手のとくと同様に、人々が“世界を席卷する”大谷選手の活躍を熱心に視聴したのかもしれない。

一方で、大谷選手がMLB挑戦を始めた2018年と翌2019年は3試合のみである。またそれ以前の年も、イチロー選手をはじめとした多くの日本人メジャーリーガーが引き続き出場していたにもかかわらず、ランクインは5試合以下となっている。この間には、サッカーの国際試合など、ほかに高視聴率の番組があった影響でMLB中継の相対的な順位が低くなった年もあるが、視聴率の数字自体をみても、ほとんどの年が、高くても0.5%前後にとどまっていた。

その点、MLBにおいては、日本人選手が“世界に挑む”構図よりも一段階スケールアップし、日本人選手が“世界を席卷する”ほどの活躍をすることが、人々の視聴の動機になっているのかもしれない。

## Ⅱ.“国際大会が特別楽しみ”で “日本の勝利に歓喜”する女性40・50代

ここまで、視聴の実態面から、女性40・50代を中心とした人々がスポーツの国際大会をよく見ていたことを明らかにしてきた。では、意識面では、“ふだんのスポーツ”と国際大会にどのような違いがあるのだろうか。

ここからは、まさに国際的なスポーツ大会の最たるものであるオリンピック・パラリンピック（以下、五輪・パラ）について、文研が東京大会の5年前にあたる2016年10月から大会後の2021年9月にかけて、全国20歳以上3,600人に対して、7回にわたって実施した「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」の結果から考える。

まずは大会後の2021年9月に行った第7回調査で、東京五輪・パラを『楽しめた（とても+まあ）』と答えた人の割合を、男女年層別に示す（図5）。どの年代も7割前後と多数を占めているが、中でも女性40・50代は76%と全体（72%）よりも高かった。

では、“ふだんのスポーツ”視聴についてはどうか。実態については前段で語ったが、念のため、意識面もたしかめておく。

第7回調査で、ふだんテレビやラジオ、インターネットなどでスポーツを『見る（聞く）（よく+まあ）』と答えた人の割合（図6）は、全体の58%に対し、女性20・30代（41%）と女性40・50代（46%）では半数に満たず、低かった。

図5と図6のグラフを重ねて、図7として示すと、女性40・50代以下での、“ふだんのスポーツ”を『見る（聞く）』人の少なさと、五輪・パラを『楽しめた』人の多さ、その両者のあいだにある隔たりの大きさが一目瞭然である。特

図5 東京五輪・パラ『楽しめた』(男女年層別)

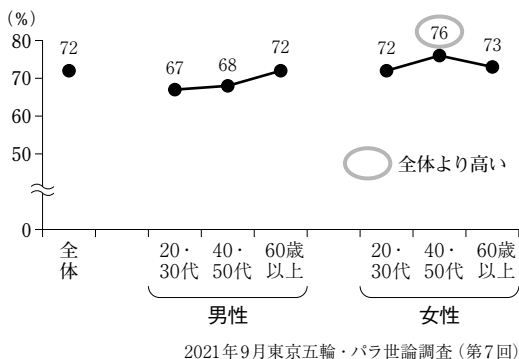


図6 ふだんスポーツ『見る(聞く)』(男女年層別)

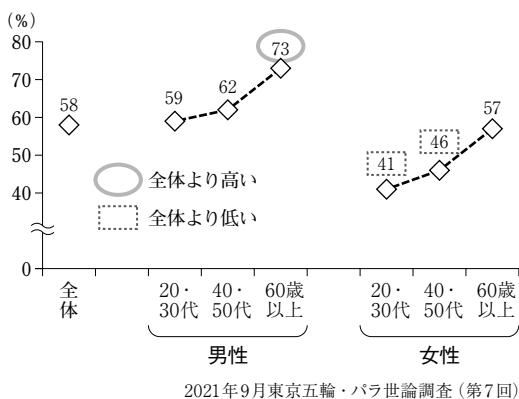
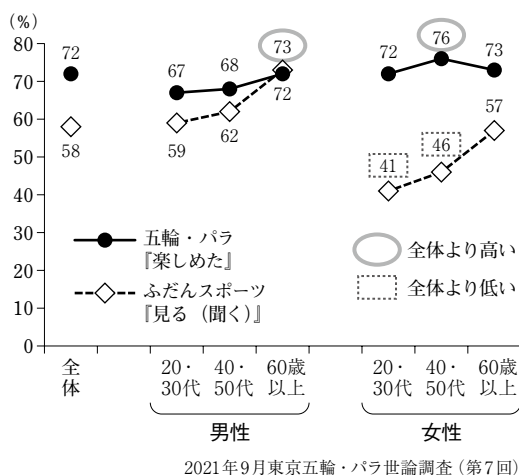


図7 東京五輪・パラ『楽しめた』と、ふだんスポーツ『見る(聞く)』(男女年層別・再掲)



に女性40・50代は、“ふだんのスポーツ”を視聴する人は全体より少ないのに、五輪・パラを楽しめた人は全体より多いという極端な結果となった。実際に、“ふだんのスポーツ”を『見ない(聞かない)』女性40・50代(231人)のうち65%が、五輪・パラは『楽しめた』と回答しているのである。

では、女性40・50代は、東京五輪・パラをどのように楽しんだのだろうか。第7回調査で、東京五輪・パラの楽しみ方を複数回答で尋ねた結果を、女性40・50代と全体と比べてみる(表8)。

女性40・50代で最も多かったのは「テレビやインターネットなどで競技や式典を見ること」(87%)で9割近くにのぼり、全体(80%)よりも高い。次いで、電話やメール、SNSでのやりとりも含めて「家族や友人などと話題にすること」が35%と、これも全体(29%)を上回った。一方で、「お祭り気分を味わうこと」は6%

表8 東京五輪・パラ 楽しみ方

(女性40・50代と全体の比較)

(複数回答、女性40・50代の回答の多い順)

	女性 (%) 40・50代	全体
テレビやインターネットなどで競技や式典を見ること	87	80
家族や友人などと話題にすること (電話やメール、SNSでのやりとりを含む)	35	29
テレビやインターネットなどで聖火リレーを見ること	10	13
楽しめたことはなかった	8	9
選手や著名人が発信した大会関連のSNSを見ること	7	7
お祭り気分を味わうこと	6	9
その他	3	4
沿道などで直接、聖火リレーを見ること	2	2
公式グッズなどの記念品を集めること	1	1
会場に行って直接、競技や式典を見ること	1	1
競技や式典の感想などをSNSで広く発信すること	1	1
ボランティアとして大会に協力すること	0	1
関連イベントに参加すること	0	0

■ 全体より高い □ 全体より低い  
2021年9月東京五輪・パラ世論調査(第7回)



と少なく、全体(9%)よりも低かった。

次に、女性40・50代と同様に“ふだんスポーツは視聴しないが、五輪・パラは楽しんだ”人の多かった女性20・30代とも比較してみる(表9)。

女性20・30代でも、「テレビやインターネットなどで競技や式典を見ること」(78%)が最も多く、「家族や友人などと話題にすること」(36%)が2番目に多いという順番は同じである。ただし、割合に注目すると、「テレビやインターネットなどで競技や式典を見ること」は、女性40・50代(87%)のほうが、女性20・30代(78%)よりも高い。一方で、「お祭り気分を味わうこと」は、逆に女性40・50代(6%)のほうが、女性20・30代(11%)よりも低い。

このように、“ふだんスポーツは視聴しないが、五輪・パラは楽しんだ”女性20・30代と女

性40・50代は、いずれもメディアを通じた観戦や、大会をきっかけにした周囲とのコミュニケーションを楽しんでいた点で共通しているが、くわしくみると、女性40・50代は、女性20・30代よりは、イベント的なお祭り騒ぎとしてではなく、国際的なスポーツ大会である五輪・パラの観戦そのものを楽しんでいた人が多い。

同様の傾向は、東京五輪に『(開催前から)関心があった(大変+まあ)』と答えた人に、その理由を複数回答で尋ねた結果からも読み取れる(表10)。

まず、「日本で開催されたから」という理由が最も高いのは、全体(80%)、女性20・30代(82%)、女性40・50代(81%)とも同じで、割合としても同程度であった。

女性40・50代では、「応援したい選手がいたから」が34%と、全体(26%)よりも高い。

表9 東京五輪・パラ 楽しみ方  
(女性40・50代と女性20・30代の比較)  
(複数回答、女性40・50代の回答の多い順)

	女性 20・30代 (%)		女性 40・50代
テレビやインターネットなどで 競技や式典を見ること	78	<	87
家族や友人などと話題にすること (電話やメール、SNSでのやりとりを含む)	36		35
テレビやインターネットなどで 聖火リレーを見ること	7		10
楽しめたことはなかった	9		8
選手や著名人が発信した大会関連の SNSを見ること	10		7
お祭り気分を味わうこと	11	>	6
その他	3		3
沿道などで直接、聖火リレーを見ること	2		2
公式グッズなどの記念品を集めること	2		1
会場に行って直接、競技や式典を見ること	1		1
競技や式典の感想などをSNSで 広く発信すること	1		1
ボランティアとして大会に協力すること	0		0
関連イベントに参加すること	1	>	0

■全体より高い □全体より低い  
2021年9月東京五輪・パラ世論調査(第7回)

表10 東京五輪 関心を持った理由  
(女性40・50代と女性20・30代、全体の比較)

(分母「関心があった」と答えた人、複数回答、女性40・50代の回答の多い順)

	女性 20・30代 (%) (134人)	女性 40・50代 (%) (271人)	全体 (%) (1,416人)
日本で開催されたから	82	81	80
新型コロナウイルスの影響で 大会がどうなるか気になったから	57	51	57
大会を開催することによって新型コロナウイ ルスの感染が拡大しないか気になったから	46	44	46
スポーツが好きだから	46	39	52
好きな競技があったから	32	38	37
応援したい選手がいたから	26	34	26
オリンピックが好きだから	24	26	28
メディアが取り上げていたから	16	13	11
周囲の人が話題にしていたから	11	>	5
自分の生活に影響が出そうだったから	6	4	3
その他	2	3	2
自分の仕事に関係があったから	3	1	2

■全体より高い □全体より低い  
2021年9月東京五輪・パラ世論調査(第7回)

逆に、もともと「スポーツが好きだから」(39%)は、全体(52%)よりも大幅に低い。ここからも、女性40・50代がふだんはスポーツに対してそれほど関心がないにもかかわらず、五輪という大規模な国際大会に際しては、日本を代表する選手たちを応援したいという強いモチベーションを持っていたことがうかがえる。

一方、女性20・30代との比較で興味深いのは、「周囲の人が話題にしていたから」という項目である。女性40・50代では全体と同じ5%にとどまり、女性20・30代(11%)よりも低かった。

このように、女性の20・30代と40・50代では、“ふだんスポーツは視聴しないが、五輪・パラは楽しんだ”人の割合が全体よりも高かったが、結果を細かくみていくと、ある種のブームに乗るような雰囲気や「周囲の人が話題にしていたから」「お祭り気分を味わうこと」にした人が女性20・30代のほうで多く、スポーツの国際大会そのものの醍醐味とも言える「応援したい選手がいたから」「テレビやインターネットなどで競技や式典を見た」人が女性40・50代のほうで多かったという特徴も浮かび上がるのである。

“ふだんのスポーツ”と国際大会に対する、視聴実態や意識の違いを明らかにするという本稿のねらいからは少々逸脱するが、今回の東京五輪・パラは、コロナ禍での開催であったという点を度外視して語るのが難しい。

そこでここからは少しページを割いて、実態と意識の両面で国際大会を特別なものと捉えている様子やうかがえる女性40・50代を中心に、人々がコロナ禍の中でどのように五輪・パラ開催を迎え、どんな感想を持ったのかについて、まとめておきたい。ただしこの記述は単なる余談ではない。延期や中止も議論された困難な状況だからこそ、人々が国際スポーツ大

会の開催や視聴に対してどのような思いを持っているのかが調査結果にははっきりと表れていると思わされる点もあったためである。

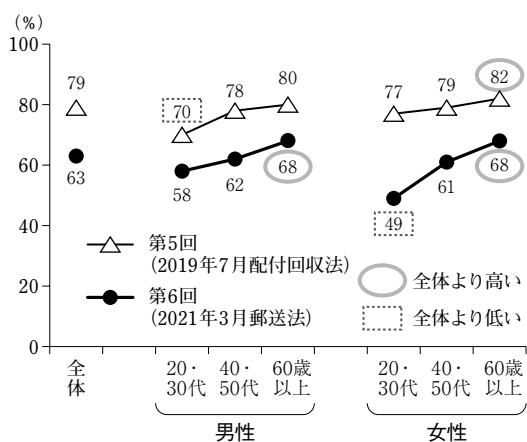
図8は、当初の開催予定の1年前にあたる2019年7月に配付回収法で実施した第5回調査と、実際の大会が4か月後に迫った2021年3月に郵送法で実施した第6回調査で、それぞれ「東京五輪・パラの開催が楽しみ」かどうかを尋ねた結果である。両調査は別手法なので単純比較はできないが、ここでは、コロナ禍前後での気分の変化をみる目的で見比べたい。

まず、第5回の時点では、全体の79%が『楽しみ』であると答え、どの年代も7～8割ほどと圧倒的多数を占めていた。

その後、コロナ禍となり、大会は1年延期された。そうした厳しい状況の中で実施した第6回では、『楽しみ』が63%と大幅に低くなった。男女年層別にみても、すべての層で第5回よりも『楽しみ』の割合が低くなり、特に男性40・50代や女性の20・30代、40・50代では落ち込みが大きかった。

第6回調査ではさらにストレートに、感染が

図8 東京五輪・パラ『楽しみ』(男女年層別)



東京五輪・パラ世論調査

起きる前よりも楽しみではなくなったかどうかを尋ねた(表11)。

その結果、全体の60%が「感染が起きる前より、楽しみではなくなった」と答え、特に女性40・50代で71%、女性20・30代でも67%と、女性の若中年層では、感染状況や開催可否の先行きが見通せない中で、大会を楽しみにする気持ちがしぼんでしまっていた。

表12は、コロナ禍での開催に対するさまざまな意見について、それぞれ、そう思うか否かを尋ねた結果である。

女性20・30代と女性40・50代に注目すると、「海外から大勢の人が訪れて国内で感染が広がるおそれがある」という意見が、女性20・30代で97%、女性40・50代で96%と全体(92%)より高い。また「観客数の制限や日本を訪れる

表11 東京五輪・パラ「コロナ禍前より、楽しみではなくなった」(男女年層別)

全体	男性			女性		
	20・30代	40・50代	60歳以上	20・30代	40・50代	60歳以上
60	60	61	51	67	71	57

(%)  
 全体より高い  全体より低い  
 2021年3月東京五輪・パラ世論調査(第6回)

表12 東京五輪・パラ コロナ禍での開催に対する意見  
 (「そう思う」と答えた人の割合、男女年層別)

	全体	男性			女性		
		20・30代	40・50代	60歳以上	20・30代	40・50代	60歳以上
海外から大勢の人が訪れて国内で感染が広がるおそれがある	92	96	92	88	97	96	88
観客数の制限や日本を訪れる外国人の減少などで期待していた経済効果が見込めない	83	91	84	76	87	87	81
感染者が多い国の選手は練習が思うようにできず実力を発揮できない	75	77	73	74	75	79	73
感染が気になって大会を心から楽しめない	66	64	67	60	77	70	63
今は感染拡大を防ぐことに力を注ぐべきで、大会を開催している場合ではない	51	59	54	46	60	54	44
新型コロナウイルスの困難を乗り越えるためにも、大会を成功させるべきである	45	45	44	48	40	39	49
マスクの着用など感染対策の徹底で大会が盛り上がらない	30	33	34	34	27	24	29

(%)  
 全体より高い  全体より低い  
 2021年3月東京五輪・パラ世論調査(第6回)

外国人の減少などで期待していた経済効果が見込めない」も、女性の20・30代、40・50代とも87%にのぼった。このように、開催によるさらなる感染拡大や、経済へのマイナスの影響を心配する気持ちが、彼女たちが「コロナ禍前より、楽しみではなくなった」大きな原因なのだろう。

また、そのほかの項目をみると、全体との比較の中で、女性20・30代と40・50代、それぞれの特徴的な傾向も浮かび上がってくる。

まず、女性20・30代では、「感染が気になって大会を心から楽しめない」(77%、全体は66%)、「今は感染拡大を防ぐことに力を注ぐべきで、大会を開催している場合ではない」(60%、全体は51%)が全体より高い。

一方の女性40・50代では、「感染者が多い国の選手は練習が思うようにできず実力を発揮できない」が79%にのぼり、全体(75%)を上回った。

自分自身が楽しめなくなることを残念がり、こんな状況ならば開催しないほうがいいのではないかと考える人が多かった女性20・30代に対し、女性40・50代では、選手のパフォーマンスが低下してしまうことを案ずる人が多かったのである。

第6回調査ではさらに、大会を予定どおり「開催すべき」か「さらに延期すべき」か「中止すべき」かを尋ねたうえで、「開催すべき」「さらに延期すべき」と答えた人たちに対して、「中止すべきではない」と考える一番の理由を尋ねた(表13)。

全体では「選手たちの努力が報われないから」が46%で

最も多かったが、女性40・50代では55%と特に高かった。一方で、「新型コロナの危機を乗り越えた象徴になるから」は女性40・50代ではわずか2%しかいなかった。コロナ禍の厳しい状況でも、中止だけは避けられまいかと願って

表13 東京五輪・パラ 「中止すべきではない」理由  
(分母：大会を「開催すべき」「さらに延期すべき」と答えた人、男女年層別)

	全体 (%) (1,552人)	男性			女性		
		20・30代 (113人)	40・50代 (252人)	60歳以上 (343人)	20・30代 (167人)	40・50代 (297人)	60歳以上 (380人)
選手たちの努力が報われないから	46	42	41	41	46	55	47
日本での開催を楽しみにしているから	21	19	22	25	21	17	21
これまでに投じた予算や準備がもだになるから	19	22	18	18	21	18	18
経済の回復が期待できるから	6	13	8	5	7	4	3
新型コロナの危機を乗り越えた象徴になるから	6	4	6	9	4	2	7
その他	3	1	4	2	1	4	2

■全体より高い □全体より低い 2021年3月東京五輪・パラ世論調査(第6回)

た女性40・50代が第一に望んだのは、大会に向けて努力を重ねてきた選手たちが報われることだったのである。裏を返せば、各国の代表選手たちが日頃の練習の成果を発揮し合う国際スポーツ大会としての五輪・パラを楽しみにする気持ちが、非常に強かった様子がうかがえるのである。

東京五輪・パラは、2021年夏に、ほとんどの競技が無観客という形ではあったが、なんとか開催された。結果的に多くの人々がテレビやインターネットで観戦したり、周囲の人と話題にして盛り上がったりしたことはすでに述べたとおりである。なお、テレビやインターネットでの観戦について補足しておく、女性20代では家族のほか、友人や知人と一緒に視聴した人が全体より多く、女性40・50代では配偶者・パートナーや、子どもや孫と一緒に視聴した人が全体より多かった。

大会後の第7回調査で「五輪・パラのおかげで、なんとなく楽しい気分になった」かどうかを尋ねたところ(表14)、全体の67%が「そう思う(楽しい気分になった)」と答えた。日本中が、混乱と閉塞感で息苦しささえ感じるようだったコロナ禍の中で、人々は五輪・パラによって、束の間とはいえ、心弾む時間を過ごせたのである。中でも女性20・30代(75%)と女性40・50代(73%)では「楽しい気分になった」

表14 東京五輪・パラ「開催で、なんとなく楽しい気分になった」(男女年層別)

全体	男性			女性		
	20・30代	40・50代	60歳以上	20・30代	40・50代	60歳以上
67	71	68	61	75	73	60

■全体より高い □全体より低い 2021年9月東京五輪・パラ世論調査(第7回)

という人が多かった。

ふだんスポーツを視聴する人が少ないにもかかわらず、彼女たちが五輪・パラをさかんに視聴して楽しんだ背景には、日常的に「国際的なスポーツ大会ならばよく見る」という傾向に加え、新型コロナの感染拡大を危惧する人が特に多かったこの年代の女性たちが、せめてひとときでもコロナ禍の恐怖と鬱屈から解放されたいと願い、身近な人たちと一緒に盛り上げられる五輪・パラの観戦に駆り立てられたという側面もあるのかもしれない。

また、この年代の女性の意識を分析するにあたっては、「子ども」の存在も無視できない。第7回調査で尋ねた家族構成をみると、女性20～40代の42%が「未成年の子どもがいる」と回答しており、全体(21%)よりも多い。五輪やコロナ禍について考える際、彼女たちの頭の中には、自分自身が何を楽しみ、何を不安に思うかというレベルの話だけではなく、“母親”としての意識もあったであろう。

大会前の第6回調査では、東京五輪で「見たいと思う競技や式典」があると答えた人に、なぜ見たいのかを複数回答で尋ねたところ、「家族や友人に見せてあげたいから」という理由を挙げた人が、女性の30・40代では7%と、全体(4%)よりも多かった。第7回調査で尋ねた実際の大会の視聴に関しても、女性40代では「子どもや孫」と見た人が51%と、すべての年代で唯一5割を超えた。“母親”である人も多いこの年代の女性は、「せっかく半世紀ぶりに東京で開催される国際的なスポーツの祭典を子どもに見せてあげたい」と願っていたし、実際に多くの人が、テレビで観戦するしかなかったとはいえ、子どもと一緒に楽しんだのである。

### Ⅲ.“熱しやすく、冷めやすい” 国際大会の感動

ここまで、特に女性40・50代を中心とした人々が、実態面でも意識面でも、国際大会を、「ふだんのスポーツ」とは違う、特別なものとして捉えている様子を見てきた。

ここからは、国際大会終了後の、人々の意識について考えてみたい。

「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」では、2017年の第2回調査から毎回、「見たい競技・式典」を、大会後の第7回では「印象に残った競技・式典」を尋ねた。

表15は、大会4か月前の第6回と、大会直後の第7回、それぞれの全体のトップ10である。

第6回では「陸上競技」「体操競技」「開会式」「競泳」が上位となった。なお、第2回から第5回までも、順位や割合に多少の違いはあるが、つねにこの4つが上位を占め続けていた。

しかし、大会後の「印象に残った競技・式

表15 東京五輪 「印象に残った競技・式典」  
(第6回「見たい競技・式典」との比較)  
(複数回答、各回で回答の多かった10項目)

第6回 「見たい競技・式典」			第7回 「印象に残った競技・式典」		
順位		(%)	順位		(%)
1	陸上競技	57	1	卓球	64
2	体操競技	55	2	柔道	51
3	開会式	52	3	ソフトボール	47
4	競泳	49	4	体操競技	43
5	野球・ソフトボール	40	4	野球	
	閉会式		6	開会式	42
8	卓球	38	7	競泳	39
	柔道		8	スケートボード	37
10	バレーボール	34	9	陸上競技	34
	バドミントン		10	バスケットボール	30

東京五輪・パラ世論調査

典」では、上位の顔ぶれが変わった。第6回では5番目(40%)だった「卓球」が、第7回では64%でトップとなった。次いで、第6回では8番目(38%)だった「柔道」が51%で2番目に、第6回では「野球・ソフトボール」として尋ねて5番目(40%)だった「ソフトボール」が47%で3番目となった。

さらに、大会前には1度もトップ10に入らず、第6回では「見たい」人が13%しかいなかった「スケートボード」が37%と飛躍的に伸びて8番目に、また、第6回は19%だった「バスケットボール」も、第7回では30%となり、10番目にランクインした。こうした競技はすべて、日本がメダルを獲得したものである。

なお、調査では、競技名ではなく、東京五輪の競技で「最も印象に残ったこと」という尋ね方でも質問したが、「日本が過去最多の金メダルを獲得したこと」(30%)と、「10代など若い選手たちの活躍ぶり」(29%)がともに3割と多数を占めた。

その点では、たしかにランキング上位となったもののほとんどは金メダル獲得競技であるし、特にスケートボードは、メダリストたちの大会当時の年齢をみても、男子ストリート金メ

ダルの堀米雄斗選手が22歳、女子ストリート金メダルの西矢栞選手が13歳（日本史上最年少の金メダリスト）、銅メダルの中山楓奈選手が16歳、女子パーク金メダルの四十住さくら選手が19歳、銀メダルの開心那選手が12歳と、若い選手たちがめざましい活躍を見せたのであるから、競技として印象に残った人が多いことも大いにうなずける。

また、女子パークで15歳の岡本碧優選手が逆転優勝をかけて挑んだ最後の滑走で着地に失敗したあと、先に演技を終えていた多くの選手たちが駆け寄って健闘をたたえたシーンに感動を覚えた人も多かったようで、印象に残ったことを自由記述形式で尋ねた問いでも、

「スケートボードの決勝で、優勝候補の選手が最後までチャレンジし続けた勇氣。結果的に表彰台を逃したものの、そのチャレンジを選手同士がたたえ合う姿を見て、メダルを勝ち取るのとは異なる、スポーツの新しい価値観や可能性を感じた」（男性40代）  
 「負けても人を思う気持ち。勝つだけではない。若い人のこれからの生き方が楽しみだ」（女性20代）

といった回答が、若中年層を中心に多くみられた。勝ち負けだけではなく、これまであまり知らなかったスケートボードの“競技文化”にも初めて触れ、感銘を受けた人が多かったのである。

なお、東京五輪における「スケートボード」や「バスケットボール」のように、大会前にあまり注目されていなかった競技が、日本勢の活躍によって一躍注目を浴びる現象は、2018年のピョンチャン冬季五輪でも起きていた（表16）。

象徴的なのは、同大会で女子チームが初の銅メダルを獲得した「カーリング」の変化であ

表16 ピョンチャン冬季五輪「見た競技・式典」  
 （第2回「見たい競技・式典」との比較）  
 （複数回答、各回で回答の多かった10項目）

順位	第2回 「見たい競技・式典」	順位	第3回 「見た競技・式典」
1	フィギュアスケート 68	1	フィギュアスケート 79
2	スキージャンプ 63	2	スピードスケート 70
3	開会式 41		カーリング
4	スピードスケート 37	4	スキージャンプ 59
5	スノーボード 29	5	スノーボード 50
	閉会式	6	ショートトラック スピードスケート 39
7	カーリング 25	7	開会式 37
8	アルペンスキー 24	8	ノルディック複合 29
9	ノルディック複合 21	9	閉会式 22
10	ショートトラック スピードスケート 14	10	アルペンスキー 20

東京五輪・パラ世論調査

る。大会前には「見たい」人が25%しかいなかったが、大会後には70%へと跳ね上がった。「カーリング」については、大会当時、その戦績だけではなく、競技の合間におやつをほおぼる“もぐもぐタイム”や、ふだんの仕事や生活の様子など、選手たちに関するさまざまなエピソードもテレビのニュースやワイドショーで連日のように取り上げられ、多くの人の印象に残ったのかもしれない。

また、金メダル獲得競技である「スピードスケート」も37%から70%に、銀メダル獲得競技である「スノーボード」も29%から50%にそれぞれ大幅に増えた。

このように、ピョンチャン五輪においても、成績そのものがめざましかったり、選手たちの素顔などがメディアでさかんに取り上げられたりした競技が、軒並み、大会前よりも多くの人の印象に残ったのである。

話を東京五輪に戻し、印象に残った競技や式典が性別や年代によって異なることに注目したい。表17は、男女年層別にトップ5を並べたものである。前提として、各競技や式典が「印

象に残った」と答えた人の割合は、男女とも60代以上で全体より高めなのだが、ここでは、年代別の特徴を浮き彫りにすることを目的とし、各年代における順位のみ注目する。

まずは、男女ともどの年代も「卓球」がトップであるほか、「柔道」や「ソフトボール」もほとんどの年代でトップ5に入っている。一方で、全体ではトップ5に入らなかったが、年代によってはランクインしたものもある。「スケートボード」は女性の20代と30代で2番目になったほか、男性30代と女性40代では3番目、男性40代と女性50代でも4番目になるなど、若中年層で上位に入った。また、「バスケットボール」も女性40代の4番目、男性20代の5番目に入っている。

女性40・50代では、こうした競技が「印象

に残った」と答えた人の割合自体も高く、「スケートボード」は女性40代が46%、女性50代が45%（全体は37%）、「バスケットボール」は女性40代が39%（全体は30%）と、それぞれ全体を上回っている。

なお、トップ5には入らなかったが、女性40代では「サーフィン」（18%、全体は13%）、女性50代では「フェンシング」（18%、全体は12%）も、それぞれ全体よりも割合が高かった。こうした、女性40・50代で全体よりも割合が高くなった競技のほとんどは、大会前にはメディアなどでそれほど取り上げられることがなかったが、日本勢の活躍で、にわかに注目されたという点で共通している。

表18は、東京五輪の競技で「最も印象に残ったこと」という問いへの、男女年層別の回

表17 東京五輪「印象に残った競技・式典」（複数回答、男女年層別トップ5）

(%)

男性											
20代		30代		40代		50代		60代		70歳以上	
卓球	48	卓球	55	卓球	60	卓球	62	卓球	70	卓球	65
野球	38	柔道	40	柔道	50	柔道	56	柔道	68	野球	63
開会式	34	スケートボード	38	野球	47	ソフトボール	50	ソフトボール	61	柔道	62
サッカー		野球		41	ソフトボール	44	野球	55	ソフトボール	59	
バスケットボール	29	ソフトボール	36	ソフトボール	41	体操競技	36	体操競技	54	体操競技	51
柔道、体操競技、ソフトボール											

女性											
20代		30代		40代		50代		60代		70歳以上	
卓球	49	卓球	53	卓球	64	卓球	68	卓球	71	卓球	72
スケートボード	36	スケートボード	42	柔道	48	柔道	54	ソフトボール	54	体操競技	59
野球		柔道	36	スケートボード	46	ソフトボール	49	体操競技		55	
柔道		開会式	35	バスケットボール	39	スケートボード	45	柔道		競泳	50
開会式		ソフトボール	34	ソフトボール	38	開会式	44	競泳	49	柔道	49

□ 全体のトップ5に入らない競技 2021年9月東京五輪・パラ世論調査（第7回）

表18 東京五輪「最も印象に残ったこと」（男女年層別、全体の回答の多い順）

	全体	男性							女性						
		20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上		
日本が過去最多の金メダルを獲得したこと	30	31	28	31	34	26	30	33	28	30	37	26	27		
10代など若い選手たちの活躍ぶり	29	32	29	29	30	31	27	36	25	27	31	26	30		
国や地域を越えて、選手同士がたたえあう姿	14	9	19	12	10	16	16	11	15	12	13	17	16		
今まで見たことのなかった競技の面白さ	13	15	15	16	15	12	10	9	22	19	9	12	8		
世界記録の達成や演技のすばらしさ	11	9	10	10	7	12	13	9	7	10	10	17	12		

■ 全体より高い 2021年9月東京五輪・パラ世論調査（第7回）

答結果である。

全体で「日本が過去最多の金メダルを獲得したこと」と「10代など若い選手たちの活躍ぶり」がともに約3割で同程度であったことはすでに述べたとおりだが、男女年層別にみると、女性50代では「日本が過去最多の金メダルを獲得したこと」が37%で、ほかの項目よりも高く、しかも全体（30%）と比べても高かった。

女性40・50代が、日本が“世界に挑む”国際大会をよく視聴し、東京五輪・パラにおいては、大イベントの“ムード”を楽しんでいた女性20・30代よりも、“国際的なスポーツ大会の観戦そのもの”を楽しんでいた人が多かったと述べたが、この質問においても、彼女たちがまさに日本が“世界に挑み、勝利する”姿に、ほかの年代以上に夢中になっていた様子が浮かび上がるのである。

このように「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」では、女性40・50代を中心とした多くの人々が、大会前にはさほど関心がなかったにもかかわらず、実際の大会での日本勢の活躍ぶりを視聴し、その感動を胸に刻み込んでいたことがわかった。

その後のサッカーW杯や野球のWBCの際にも、日本代表の快進撃で国内の盛り上がりは日に日に高まり、“にわかファン”などという言葉もよく聞かれたほどであるのだから、まずは人々が、スポーツの国際大会において“熱しやすい”ということは明らかであろう。

ではその熱は、大会終了後にも持続するのか、それとも“熱しやすく、冷めやすい”のか。ふたたび文研の「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」の結果から考えてみたい。

表19は、東京五輪・パラ閉幕直後の2021

表19 東京五輪・パラ「盛り上がりは一時的なことに過ぎなかった」（男女年層別）

性別	全体 (%)	男性			女性		
		20・30代	40・50代	60歳以上	20・30代	40・50代	60歳以上
そう思う	65	68	73	63	70	66	60
そう思わない	30	32	26	30	29	33	30

■全体より高い 2021年9月東京五輪・パラ世論調査（第7回）

年9月に実施した第7回調査で、「東京五輪・パラの盛り上がりは、一時的なことに過ぎなかった」と思うかどうかを尋ねた結果である。

全体の65%が「そう思う」と答えた。男女年層別にみても、すべての層で「そう思う」が「そう思わない」を圧倒的に上回り、全体より高くなった男性の40・50代（73%）をはじめ、男性20・30代（68%）、女性の20・30代（70%）と40・50代（66%）でも、約7割にのぼっている。こうした年代では、ふだんスポーツを視聴しない人も含め、多くの人が五輪・パラをメディアで視聴し、日本の勝利や若い選手の活躍に夢中になったのであるが、実は、“この盛り上がりは刹那的なものだ”と割り切った意見も持っていたのである。

そうした、いわば“冷めやすい”傾向が、調査結果から読み取れるケースを紹介したい。

表20は、2016年のリオデジャネイロ（以下、リオ）五輪で日本がメダルを獲得した主な競技に絞って、「東京五輪で見たい競技」として挙げた人の割合の推移を示したものである。

表20 東京五輪で「見たい」と答えた人の割合（複数回答、一部抜粋）

	第2回 2017年10月 リオの1年後	第3回 2018年3月 リオの1年半後	第4回 2018年10月 リオの2年後	第5回 2019年7月 リオの3年後
陸上競技	66	> 62	64	< 67
卓球	50	50	> 44	45
柔道	48	> 44	> 39	40
レスリング	35	34	> 23	24

東京五輪・パラ世論調査



リオ五輪の1年後にあたる第2回では、男子4×100mリレーで銀メダルを獲得した「陸上競技」が66%、男子シングルの水谷隼選手のほか男女とも団体でもメダルをとった「卓球」が50%、メダルラッシュ（12個）となった「柔道」が48%、金4つを含む7個のメダルを手にした「レスリング」が35%であった。

ところが、リオ五輪一年半後の第3回では「陸上競技」（第2回66%→第3回62%）、「柔道」（第2回48%→第3回44%）が減少し、さらに半年後の第4回にかけては「卓球」（第3回50%→第4回44%）、「柔道」（第3回44%→第4回39%）、「レスリング」（第3回34%→第4回23%）が減少した。

つまり、五輪での活躍でにわかに高まった各競技の観戦熱は、たった2年という短い期間のうちに、軒並み、冷えていったのである。

本稿の冒頭で、人々がよく視聴する国際大会として取り上げた「サッカー」についてもみてみる（表21）。

やはり「サッカー」も、リオ大会後の第2回（43%）から大会一年半後の第3回（37%）にかけて減少がみられた。ただし、第4回以降は続落することなく、第5回（42%）には第2回と同程度まで盛り返した。その背景には、2018年6月にロシアでのW杯、2019年1月にアジア杯、同年6月にコパ・アメリカと、五輪以外にも大きな国際大会が定期的開催され、そのたびにメディアでも試合中継や関連ニュースなどで取り上げられるという、サッカーならではの事情があるのかもしれない。

なお、2018年6月のサッカーW杯ロシア大会で、日本代表は、2022年のカタール大会と

同じベスト16という結果であった。本田圭佑、香川真司、大迫勇也などタレントぞろいのメンバーが、1次リーグで格上の相手を撃破し、決勝トーナメント初戦で惜敗。テレビ各局の試合中継の視聴率もカタール大会同様に高く、試合後は渋谷スクランブル交差点での若者たちの騒ぎぶりに“DJポリス”まで出動した。

そうした熱狂ぶりを目の当たりにしていた筆者としては、逆に、あれだけ盛り上がったにもかかわらず、第3回（37%）から第4回（39%）のあいだで増加が生じなかったことが不思議に思えなくもない。

そこで、「全国個人視聴率調査」から、ロシア大会1年前と1年後に行われたサッカー「キリン杯」日本代表戦の、関東地方の視聴率をみってみる。なお、表22の3試合はいずれも19・20時台キックオフであった。

全体では、ロシア大会の前もあとも8～9%と同程度であり、変化がなかった。これを、“W杯のおかげで下がらずに済んだ”とみるべきか、“たった1年でW杯の熱気が冷め、通常に

表21 東京五輪でサッカーを「見たい」と答えた人の割合（他競技との複数回答）

	第2回 2017年10月 リオの1年後 (%)	第3回 2018年3月 リオの1年半後	第4回 2018年10月 リオの2年後	第5回 2019年7月 リオの3年後
サッカー	43	37	39	42

2018年6月 ロシアW杯  
2019年1月 アジア杯  
2019年6月 コパ・アメリカ

東京五輪・パラ世論調査

表22 サッカー「キリン杯」日本代表戦の視聴率（男女年層別）

	全体 (%)	男性				女性				
		7～19歳	20・30代	40・50代	60歳以上	7～19歳	20・30代	40・50代	60歳以上	
2017年6月	シリア戦	9.0	10	10	8	14	3	6	8	10
2019年6月	トリニダード・トバゴ戦	9.0	6	11	8	12	5	8	8	9
	エルサルバドル戦	8.3	7	11	8	16	3	3	4	8

■全体より高い □全体より低い 全国個人視聴率調査（配付回収法、関東）

戻ってしまった”とみるべきかは難しいところだが、少なくとも“W杯のおかげで視聴率が格段に高まり、それが1年間維持された”ということがなかったというのはたしかである。

特に女性40・50代では、ロシアW杯1年後の「エルサルバドル戦」は4%と低調になり、全体よりも低くなった。もちろん、冒頭の視聴実態で述べたように、女性40・50代のスポーツ視聴において、4%という数字は決して低いわけではない。しかし、W杯ロシア大会時、女性も含めて多くの人たちが盛り上がっていた姿が目に焼きついていて筆者にとっては、もう少し高くなってもよさそうなものなのにと、少し意外な気もした。彼女たちにとっては、まずは国際大会であることが、関心を持ったり、実際に視聴したりすることの動機になるが、そうした国際大会の中でも特に、五輪やW杯といった各競技の“最高峰の国際大会”だけが“別物”であるのかもしれない。

## まとめ

本稿では、過去に文研が実施した「全国個人視聴率調査」や「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」の結果を長期的・横断的に分析することで、女性40・50代を中心とした人々が、スポーツの国際大会を“ふだんのスポーツ”よりもよく視聴する実態や、その背景に、日本選手が“世界（最高峰の大会）に挑む”のを応援し、“世界を席卷する”活躍を大いに喜ぶという意識があることを明らかにした。一方で、そうした国際大会への観戦意欲は“熱しやすく、冷めやすい”という一面も浮き彫りになった。

スポーツ界ではこの先も、2023年の夏にサッ

カー女子のW杯、秋にはラグビーW杯フランス大会、翌2024年の夏にはパリで五輪・パラと、“最高峰の国際大会”が続く。

果たして、東京五輪・パラや、サッカー男子のW杯、野球のWBCで新たに各競技や日本代表チームを好きになった人々の応援・視聴の熱が高い状態が維持され、再始動する代表チームを後押しすることになるのか、それとも、やはり過去の大会の盛り上がりは一時的なものにすぎず、また“情熱の火起こし”から始めることになるのか。今後も、スポーツ大会における人々の視聴行動や意識の変化に注目していきたいと思う<sup>2)</sup>。

(さいとう たかのぶ)

## 注:

- 1) 本稿では、スポーツ中継の視聴実態を考察するのが目的であるため、マルチ放送(BS101と102で別の番組を放送するなど)の場合はスポーツ中継を優先とし、表示している。また、ニュースなどによる中断を挟んで、1つの試合が複数の番組として放送された場合は視聴率の高かったほうを優先し、表における開始時刻は該当の番組の開始時刻を示している(試合開始時刻ではない)。
- 2) 野球のWBCやMLB、サッカーW杯、五輪・パラなどに関連した分析結果は、これまでも随時「文研ブログ」として発信してきた。過去の発信内容は、文研のホームページからご参照いただきたい。  
<https://www.nhk.or.jp/bunken/>



## 〈今回用いた主な調査の『放送研究と調査』掲載号〉

- ・「2022年全国個人視聴率調査」  
2022年10月号「テレビ・ラジオ視聴(リアルタイム)の現況」(斉藤孝信・山下洋子・行木麻衣)
  - ・「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」  
第1回 2017年11月号 (鶴島瑞穂・斉藤孝信)  
第2回 2018年4月号 (鶴島瑞穂・斉藤孝信)  
第3回 2018年11月号 (原美和子・斉藤孝信)  
第4回 2019年4月号 (斉藤孝信)  
第5回 2020年1月号 (斉藤孝信)  
第6回 (掲載はなし)  
第7回 2022年6月号 (斉藤孝信)
- ※なお、同調査については『NHK放送文化研究所年報2023』でも、「人々と東京五輪・パラ」(斉藤孝信)としてまとめている。